

## 査読研究ノート

深夜アルバイトが大学生の授業意欲・学業意欲・  
大学意欲に及ぼす影響楠奥 繁則\*・成瀬 健一郎\*\*・野田 匡純\*\*\*・  
加野 佑弥\*\*\*\*・山口 郁実\*\*\*\*\*・神藤 貴昭\*\*\*\*\*

## 要旨

近年、わが国ではアルバイトを行っている学生が増えている。また、深夜業務（午後10時から午前5時）のアルバイト（深夜アルバイト）を行っている学生も少なくない。そこで本研究では、深夜アルバイトへの従事が学修意欲・大学意欲に及ぼす影響について検討する。本研究ではそれらのことを議論するために、無気力研究の観点から次の3つの仮説、仮説1「大学生は深夜アルバイトを始めると、彼・彼女らの授業意欲は低下する」、仮説2「大学生は深夜アルバイトを始めると、彼・彼女らの学業意欲は低下する」、仮説3「大学生は深夜アルバイトを始めると、彼・彼女らの大学意欲は低下する」について検討した。質問紙法によるパネル調査の結果、仮説1と2は支持されなかったが、仮説3は支持された。以上より、本研究では深夜アルバイトは学生の学修意欲（授業意欲・学業意欲）には負の影響をもたら

- 
- \* 執筆者：楠奥繁則  
所属/職位：青森中央学院大学/准教授  
機関住所：〒030-0132 青森県青森市大字横内字神田12番地  
E-mail：s-kusuoku@aomoricu.ac.jp
- \*\* 執筆者：成瀬健一郎  
所属/職位：名古屋産業大学/教務課長  
機関住所：〒488-8711 愛知県尾張旭市新居町山の田3255-5  
E-mail：naruse@nagoya-su.ac.jp
- \*\*\* 執筆者：野田匡純  
所属/機関：名古屋産業大学/現代ビジネス学部  
機関住所：〒488-8711 愛知県尾張旭市新居町山の田3255-5  
E-mail：1118098@nagoya-su.ac.jp
- \*\*\*\* 執筆者：加野佑弥  
所属/機関：立命館大学/政策科学研究科博士後期課程  
機関住所：〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町2-150  
E-mail：so0400ef@rirumei.ac.jp
- \*\*\*\*\* 執筆者：山口郁実  
所属/機関：名古屋産業大学/現代ビジネス学部  
機関住所：〒488-8711 愛知県尾張旭市新居町山の田3255-5  
E-mail：yamaguchi20200402@gmail.com
- \*\*\*\*\* 執筆者：神藤貴昭  
所属/職位：立命館大学大学院教職研究科/教授  
機関住所：〒604-8520 京都府京都市中京区西ノ京朱雀町1  
E-mail：tshintou@fc.ritsumeai.ac.jp

すという結果には至らなかったが、学生生活の意欲には負の影響をもたらすことが示された。

#### キーワード

深夜アルバイト, 大学生, 授業意欲, 学業意欲, 大学意欲, 無気力

## I. 問題と目的

### 1. 問題

一般社団法人日本私立大学連盟(2018)の調査によると、2010年の調査では常時アルバイトを行っている学生は38.9%、時々アルバイトを行っている学生は27.8%あったが、2017年の調査では前者が45.5%で、後者が29.2%と、増加傾向にある。学生のアルバイトが日常化した背景の1つとして、奨学金返済問題を発端に、貸与型奨学金の借り控えが顕著になったこと及び、その減収分をアルバイトによって補う傾向が強くなったことが考えられる(岩田, 2020)。

学生の主なアルバイト先は、厚生労働省(2015)の調査によると、①コンビニエンスストア(15.5%)、②個別指導の学習塾(14.5%)、③スーパーマーケット(11.4%)、④居酒屋(11.3%)である。そのうち、①や④では深夜時間帯に営業する店舗が多く、③においても深夜時間帯営業する店舗も少なくない。また、同調査では、40.3%の学生が時給の高い深夜時間帯の勤務があると回答している。

学生にとって、アルバイトは学校から職業社会に適応するために必要な基礎的スキルや態度の涵養を期待できる(西・柳澤, 2010; 関口, 2010; 山本・江口・楊・甲斐・佐藤ら, 2018)。しかし、長時間に及ぶアルバイトは睡眠時間の減少に影響を及ぼすことが想定される(栗原, 2017)。とりわけ、睡眠時間に行う深夜アルバイトについては、高本・古村(2018)も指摘しているように、学生に睡眠不足や疲労の蓄積をもたらすであろう。高本ら(2018)の研究では、深夜アルバイトによる睡眠不足や疲労の蓄積が、大学の授業への出席に支障を来すことが示唆されている。黒川・石村(2013)の研究で、睡眠は学生の授業意欲に影響を及ぼすことが示唆されていることも踏まえると、仮説1「大学生は深夜アルバイトを始めると、彼・彼女らの授業意欲は低下する」と考えられる(授業意欲の説明については後述する)。

前述の黒川ら(2013)の研究は、下山(1995)の意欲低下(無気力)研究に基づいたものである。下山(1995)は、真面目な男子学生が突然授業に出席なくなり、学業に関する意欲を失い、試験を受けない状態が慢性化した人格障害レベルの学生と、一般学生の意欲低下とを区別した研究を行うために、意欲低下領域尺度を作成している(表1)。この尺度はアパシー傾向測定尺度(鉄島, 1993)を基に作成され、「授業意欲低下」「学業意欲低下」「大学意欲低下」の3下位尺度から成る。授業意欲とは「授業への積極的な参加行動」(溝上, 2004, p. 78)のことである。学業意欲は、授業に限定されない一般的な学修意欲、換言す

ると、学生の授業を超えた主体的な学修における意欲のことを意味する（溝上，2004）。そして、大学意欲とは、溝上（2004）を踏まえると、授業への参加や学業活動に限定されない「趣味」「友達と会うこと」「クラブ・サークル」なども含めた学生生活全般における意欲のことである。この研究では、①授業意欲低下は「張りのなさ」（生活リズムの乱れや時間感覚の希薄化がみられ、生活の張りを失っている心理状態）と「自分のなさ」（確固とした自分がないために自己の意思決定における障害が生じている自己不確実な心理状態）、そして「味気なさ」（生活・対人関係上における活気の欠如がみられ、生活全般が味気なくなっている心理状態）が、②学業意欲低下は「張りのなさ」と「自分のなさ」が、③大学意欲低下は「張りのなさ」と「味気なさ」が影響することが示されている。

表1 意欲低下領域尺度

<p><b>【授業意欲低下】</b>                      : 学生の授業での取り組みにおける意欲低下</p> <hr/> <p>授業に出る気がしない。                      朝寝坊などで授業に遅れることが多い。                      何となく授業をさぼることがある。                      大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い。                      授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある。</p>
<p><b>【学業意欲低下】</b>                      : 学生の授業を超えた主体的な学修における意欲低下</p> <hr/> <p>※ 教師に言われなくても自分から進んで勉強する。                      勉強に関する本を読んでもすぐに飽きてしまう。                      ※ 勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる。                      ※ 必要な単位以外でも、関心のある授業はとるようにしている。                      ※ 大学で勉強をすることで自分の関心を深めている。</p>
<p><b>【大学意欲低下】</b>                      : 学生の学生生活全般における意欲低下</p> <hr/> <p>学生生活で打ち込むものがない。                      ※ 大学ではいろいろな人と交流がある。                      大学にいるより、自分ひとりであるほうがいい。                      ※ 大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である。                      大学のなかで自分の居場所がないと感じる。</p>

注) ※は逆転項目。

下山（1995），p. 150（筆者により一部加筆）。

この下山（1995）の授業意欲低下と学業意欲低下研究は、わが国の学修意欲研究の流れの1つを築いた。その下山の研究を基にした研究には、神藤・伊藤（2000）の学業文化（あるグループ内に了解されている、学業に対する考え方、学習方略、学業意欲のあり方などの総称；神藤・石村，1999）研究、溝上（2004）の学修意欲の変遷過程研究、半澤（2007，2013）の学業に対するリアリティショック（大学入学前の大学での学業イメージや期待と、入学後に経験している学業との間の、現在におけるズレによって生じた否定的な違和感）研究、楠奥・中野

(2015)の学業に対するセルフ・エフィカシー(不慣れな行動に対する自信の程度を表す概念; Bandura, 1977)研究, 中下・八藤後(2017)の学生の日常生活と学修意欲との関連研究などがある。この中下らの研究では, 下山(1995)の授業意欲低下と学業意欲低下研究を基に学修意欲を測定する尺度を作成し, 「授業中の居眠り頻度の高さ」が学修意欲を下げることを示唆されている。授業中の居眠りの頻度の高さは, 先述した「睡眠の乱れ」や「睡眠不足」とも換言できよう。中下らが作成した同尺度には, 授業意欲だけでなく, 学業意欲に関する内容も含まれていることを踏まえると, 仮説2「大学生は深夜アルバイトを始めると, 彼・彼女らの学業意欲は低下する」ことも考えられる。

下山(1995)の研究に基づいたものではないが, 睡眠が良好な学生は, そうではない学生と比較し, 大学生活を楽しんでいると感じていることも示されている(高橋・渡部・積田・宍戸, 2018)。深夜アルバイトは睡眠不足をもたらすと考えられることから(高本ら, 2018), 仮説3「大学生は深夜アルバイトを始めると, 彼・彼女らの大学意欲は低下する」と考えられる。

## 2. 目的

前述の高本ら(2018)の研究では, 深夜アルバイトと授業意欲との関連について議論しているが, 下山(1995)の無気力研究の観点から議論したものではなく, また, 時系列(学生が深夜アルバイトを開始し, 彼・彼女らの授業意欲が実際に低下したかについての確認)が加味されていない。黒川ら(2013)の研究では, その無気力研究に基づいているが, 深夜アルバイトの観点から議論されたものではない。中下ら(2017)の研究も, 深夜アルバイトの観点から議論したものではない。また, 学修意欲を授業意欲と学業意欲とに分けて議論してはいない。そして, 高橋ら(2018)の研究も, その無気力研究からみた大学意欲研究ではなく, かつ, 深夜アルバイトの観点からみたものではない。

そこで本研究の目的は, 深夜アルバイトが学生の学修意欲(授業意欲・学業意欲)と大学意欲に及ぼす影響について議論するために, 下山(1995)の無気力研究の観点から, かつ, 時系列を加味し, 先述の仮説1～3について確認することである。

株式会社ジェイック(2020)の調査によると<sup>1</sup>, 中途退学した学生の過半数が留年を経験している。同調査によれば, 留年のリスクはアルバイトに没頭することによって高まることが示唆されている。生活リズムなどの乱れを招くと考えられる深夜アルバイトに没頭してしまうと, 深夜時間帯外のアルバイトに没頭するよりも, そのリスクは高まることが予想される。本研究の範囲ではないが, 今後, 深夜アルバイトと留年, 中途退学との関連を考えるうえにおいても, 仮説1～3を確認することは意義があるだろう。

## II. 方法

仮説1, 仮説2, 仮説3を確かめるために, 東海地方にあるA大学<sup>2</sup>で2019年度後期 Semesterに開講された専門基礎科目(選択必修科目)の「経営組織」(月曜日3時限(13時~14時30分), 受講者119名; 1年生=31名, 2年生=56名, 3年生=26名, 4年生=6名)と, 専門科目(選択科目)の「組織心理学」(木曜日4時限(14時40分~16時10分), 受講者64名; 2年生=64名)の受講生を対象にした質問紙法によるパネル調査を行った。具体的な方法と, 測定した変数については次のとおりである。

### 1. 方法

事前調査は2019年9月(第1講)に実施し, 次項で述べる方法で授業意欲, 学業意欲, 大学意欲を測定した。

事後調査については2020年1月(第15講)に実施した。事後調査でも, 事前調査と同様に, 授業意欲などの3つの変数を測定した。また, 事後調査では, 組織心理学においては「9月26日~1月16日までの間に, 深夜(午後10時以降就業)のアルバイトを始めた。」, 経営組織においては「9月30日~1月27日までの間に, 深夜(午後10時以降就業)のアルバイトを始めた。」について尋ね<sup>3</sup>, 参加者には「はい」または「いいえ」で回答してもらった。「はい」と回答した者を「開始群」, 「いいえ」と回答した者を「非開始群」とした。

なお, 事前・事後調査で参加者に, 質問紙の回答と成績とは無関係であることを説明し, 任意で回答してもらった。

### 2. 測定する変数

本研究では, 表1の下山(1995)の意欲低下尺度を用いて, 学業意欲低下, 授業意欲低下, 大学意欲低下を測定した。「あてはまらない」1点から「あてはまる」5点の5件法で求め, その合計得点を学業意欲低下得点 ( $range = 5 \sim 25$ ), 授業意欲低下得点 ( $range = 5 \sim 25$ ), 大学意欲低下得点 ( $range = 5 \sim 25$ ) とした(逆転項目については, 「あてはまる」1点から「あてはまらない」5点)。意欲低下尺度なので, 得点が高ければ, 授業意欲が低い, 学業意欲が低い, 大学意欲が低いことを示している。

## III. 結果

パネル調査の参加者は110名(平均年齢19.42歳; 標準偏差1.05)であった。表2に, 測定した授業意欲低下得点, 学業意欲低下得点, 大学意欲低下得点の平均値と標準偏差を示す。大学意欲低下得点について, 深夜アルバイトを始めた「開始群」では, +1.44に対して, 「非開始群」

では、-0.75と、事後では、2.19の差が開いた。授業意欲低下得点と学業意欲低下得点については、差の開きはそれぞれ、0.72と1.18であった。

表2 各変数の平均値と標準偏差

	「開始群」		「非開始群」	
	事前	事後	事前	事後
授業意欲低下	14.08 (3.23)	14.90 (3.91)	12.37 (4.56)	12.47 (4.15)
	n = 29		n = 80	
学業意欲低下	14.62 (1.92)	15.21 (3.02)	15.04 (3.62)	14.45 (3.02)
	n = 30		n = 79	
大学意欲低下	13.13 (3.56)	14.57 (3.68)	14.18 (3.06)	13.43 (3.20)
	n = 30		n = 80	

注) ( )内の数値は標準偏差。

授業意欲低下、学業意欲低下、大学意欲低下の Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。授業意欲低下尺度は事前0.77、事後0.77であった。しかし、学業意欲低下尺度は事前0.60、事後0.51、大学意欲低下尺度については事前0.62、事後0.50であった。5項目と項目数が少なかったために、 $\alpha$  係数が低かったと考えられる。

表3に、「開始群」と「非開始群」における授業意欲低下得点、学業意欲低下得点、大学意欲低下得点の相関係数を示す。なお、事前調査で得られたデータに、事後調査で得られたデータを加えて相関係数を算出している ( $n = 58 \sim 160$ )。「非開始群」の授業意欲低下得点と、学業意欲低下得点に低い相関がみられるもの ( $r = 0.39; p < 0.001$ )、それ以外には有意な相関がみられなかった。

事前調査で測定した3変数について、「開始群」と「非開始群」の平均値に有意な差があるのかについて確かめるために、 $t$ 検定を行った。授業意欲低下得点 ( $t = 1.88, df = 107, n.s.$ )、学業意欲低下得点 ( $t = 0.59, df = 107, n.s.$ )、大学意欲低下得点 ( $t = 1.34, df = 108, n.s.$ ) に有意な差はみられなかった。

仮説1について確かめるために、授業意欲低下得点(事前、事後)を被験者内要因、深夜アルバイトを始めた「開始群」と「非開始群」を被験者間要因とする  $2 \times 2$  の2要因混合計画の分散分析を行った。分散分析の結果(表4)、交互作用は有意ではなかった ( $F(1,107) = 0.99, n.s., \text{偏 } \eta^2 = 0.01$ )。

表3 相関係数

「開始群」(事前調査+事後調査; n = 58~60)		
	学業意欲低下	大学意欲低下
授業意欲低下	0.03	0.18
学業意欲低下	-	-0.10

「非開始群」(事前調査+事後調査; n = 158~160)		
	学業意欲低下	大学意欲低下
授業意欲低下	0.39***	-0.003
学業意欲低下	-	0.15

注) \*\*\*  $p < 0.001$ 

表4 分散分析結果(授業意欲低下得点)

	df	MS	F	偏 $\eta^2$
被験者間要因				
群: A	1.00	186.48	6.45*	0.06
誤差: S (A)	107.00	28.92		
被験者内要因				
前後: B	1.00	9.03	1.58	0.02
交互作用: A × B	1.00	5.66	0.99	0.01
誤差: B × S (A)	107.00			

注) \*  $p < 0.05$ 

仮説2について確かめるために、学業意欲低下得点についても同様の分散分析を行った。分散分析の結果(表5)、交互作用は有意ではなかった( $F(1,107) = 3.24, n.s.,$  偏  $\eta^2 = 0.03$ )。

仮説3について確かめるために、大学意欲低下得点においても同様の分散分析を行った(表6)。結果、交互作用が有意であった( $F(1,108) = 8.27, p < 0.01,$  偏  $\eta^2 = 0.07$ )。前後の主効果は有意ではなかった( $F(1,108) = 0.81, n.s.,$  偏  $\eta^2 = 0.01$ )。

被験者間効果の検定は、群の主効果も有意ではなかった( $F(1,108) = 0.01, n.s.,$  偏  $\eta^2 = 0.00$ )。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。

まず、被験者間の単純主効果は、事前調査、事後調査の群間の平均値の差の多重比較検定の結果(Bonferroni法)、①事前調査:「開始」群と「非開始」群の平均値に有意差なし、②事後調査:「開始群」と「非開始群」の平均値に有意差なし、であった。事前調査における群の単純主効果は、 $F(1,108) = 1.78, n.s.,$  偏  $\eta^2 = 0.02$ , であった。事後調査における群の単純主効果は、 $F(1,108) = 2.84, n.s.,$  偏  $\eta^2 = 0.03$ , であった。

そして、被験者内の単純主効果は、各群における事前調査・事後調査の平均値の多重比較検定の結果(Bonferroni法)、①「開始群」における事前調査・事後調査の平均値に有意差あり( $p < 0.05$ )、②「非開始群」における事前調査・事後調査の平均値に有意差なし、であった。「開

始群」における事前調査・事後調査の単純主効果は、 $F(1,108) = 4.90, p < 0.05$ , 偏 $\eta^2 = 0.04$ , 「非開始群」における事前調査・事後調査の単純主効果は、 $F(1,108) = 3.58, n.s.$ , 偏 $\eta^2 = 0.04$ , であった。

図1に、大学意欲低下得点の変化を示す。

表5 分散分析結果 (学業意欲低下得点)

	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	偏 $\eta^2$
被験者間要因				
群: A	1.00	1.23	0.08	0.00
誤差: S(A)	107.00	15.22		
被験者内要因				
前後: B	1.00	0.00	0.00	0.00
交互作用: A × B	1.00	14.66	3.24	0.03
誤差: B × S(A)	107.00			

表6 分散分析結果 (大学意欲低下得点)

	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	偏 $\eta^2$
被験者間要因				
群: A	1.00	0.11	0.01	0.00
誤差: S(A)	108.00	17.01		
被験者内要因				
前後: B	1.00	5.09	0.81	0.01
交互作用: A × B	1.00	52.00	8.27**	0.07
誤差: B × S(A)	108.00			

注) \*\* $p < 0.01$

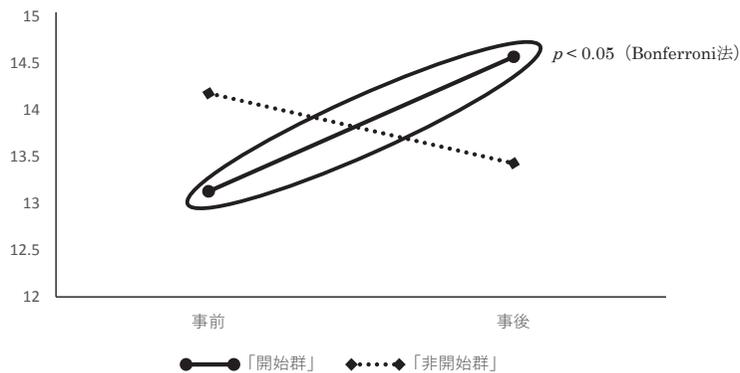


図1 大学意欲低下得点の変化

#### IV. 考察

分散分析の結果（表4，5），仮説1「大学生は深夜アルバイトを始めると、彼・彼女らの授業意欲は低下する」と、仮説2「大学生は深夜アルバイトを始めると、彼・彼女らの学業意欲は低下する」は支持されなかった。したがって、本研究では、深夜アルバイトは学修意欲に負の影響を及ぼすとは言えない。

仮説1と2が支持されなかった理由として、深夜アルバイトを開始した群の学生は、深夜アルバイトを開始するために、2019年度後期セメスターでは、意図的に午前中の授業を履修しなかったことが考えられる。分かりやすく言うと、パネル調査を実施した「経営組織」と「組織心理学」は両者共に午後に開講された科目であった。そのため、「開始群」の学生は深夜アルバイトによって生じる睡眠不足などを補うために、午前中は授業を履修せず、自宅で十分な睡眠をとっていた。結果、学業意欲低下得点と授業意欲低下得点は変化しなかった。午前中に開講される履修を避けることのできない科目で、調査を実施していれば、結果は異なったかもしれない。今後の課題である。

また、深夜アルバイトを開始する目的によって、結果が異なるのかもしれない。例えば、大学で学修するのに必要な学費のために深夜アルバイトを開始した学生の場合、学修意欲が低下しない。小遣いのために深夜アルバイトを開始した学生の場合、学修意欲が低下する。その目的を加味した研究についても、今後の課題とする。

大学意欲低下については、分散分析の結果、交互作用が有意であった（表6）。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行ったところ、深夜アルバイトの「開始群」における事前調査・事後調査の平均値のみ有意であった（図1）。以上より、仮説3「大学生は深夜アルバイトを始めると、彼・彼女らの大学意欲は低下する」については支持された。なお、本研究では「非開始群」の授業意欲低下得点と、学業意欲低下得点の間に低い相関がみられたが、それ以外に有意な相関がみられなかった（表3）。サンプルサイズが小さかったため、有意な相関がみられなかったとも考えられるが、授業意欲低下と学業意欲低下と大学意欲低下はある程度独立した概念である可能性がある。また、筆者らのB大学<sup>4</sup>の学生を対象とした研究でも、大学意欲低下とそれらとの相関分析の結果、有意な相関がみられなかった（楠奥ら，2015）。学生は学生生活において学修を最重要活動と考えない傾向があることや（溝上，2004）、表1の大学意欲低下を構成する5項目を踏まえると、授業に真面目に出ることや学業活動と、大学に行く意味を見出すことは別ということなのかもしれない。つまり、ここでいう大学意欲とは、授業への参加、学業活動以外の学生生活全般における意欲と捉えるべきだと考えられる。

サンプルサイズが小さいという問題もあるが、本研究では、深夜アルバイトは学生の学修意欲（授業意欲及び学業意欲）には負の影響をもたらすという結果には至らなかったが、大学意

欲には負の影響をもたらすことが示された。このことから、学生の一日の時間の使い方が、授業と深夜のアルバイトに偏り、それ以外のことに関心を示さなくなるのではないかと考えられる。また、主に学生が授業を受ける以外のサークルなどの活動を行う授業後の時間は、睡眠をとることが必要になるため、他の学生との交流をはかることが難しいことから大学意欲が低下していることが推測される。

以下の5点も課題としたい。

第1に、学業意欲と大学意欲を測定する尺度の再検討である。下山(1995)では、学業意欲低下と大学意欲低下の $\alpha$ 係数は、前者は0.73で、後者は0.77であった(授業意欲低下については0.73)。しかし、本研究の事前調査では、学業意欲低下と大学意欲低下の $\alpha$ 係数はやや低く、事後調査では共に低い数値であった。楠奥ら(2015)の研究でも、学業意欲低下の $\alpha$ 係数は0.64、大学意欲低下の $\alpha$ 係数は0.60とやや低い数値が報告されていることも考慮すると、学業意欲と大学意欲を測定する尺度の再検討を行う必要がある。

第2に、本研究では、「9月26日～1月16日までの間に、深夜(午後10時以降就業)のアルバイトを始めた。」の質問項目について、「はい」か「いいえ」で回答してもらった。そのため、夕方から午後10時までの時間からアルバイトを始め、終了時刻が深夜帯に掛かっている者が「はい」と回答していない可能性もある。また、本研究では、深夜アルバイトの就業期間が考慮されていない。具体的に述べると、「開始群」には、深夜アルバイトを開始し長期間継続している学生も含まれていれば、開始したものの短期間で辞めた学生も含まれている。今後の課題としたい。

第3に、本研究では深夜アルバイトの「開始群」と、「非開始群」とで分析を行ったが、深夜アルバイトと、非深夜時間帯にアルバイトを行った場合の意欲の変化についての測定を行っていない。今後の課題とする。

第4に、本研究では事前調査を実施する以前から既に深夜アルバイトを始めていた学生の学修意欲と大学意欲に、深夜アルバイトが及ぼす影響については触れていない。それについての検討も今後の課題とする。

第5に、本研究では睡眠時間や生活リズムについてのデータを収集していない。それらも踏まえた検討も今後の課題としたい。

## 謝辞

本論文を執筆する機会を与えてくださった故岩橋誠一神戸学院大学経済学部教授に御礼を申し上げますとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 註

- 1 株式会社ジェイック(2020)「【2019年度】大学中退者アンケート調査」,株式会社ジェイックホームページ〈<https://www.jaic-g.com/news/pressrelease/news-876/>〉(2020年7月27日).
- 2 A大学は単一学部収容定員1,000人未満の大学である. 島野(2018)はわが国の大学を,河合塾の入試難易ランキング表を基に,SAグループ(学部平均偏差値62.5以上)からNグループ(総定員充足率が著しく低いグループ)に分類しており,A大学はNグループに属する大学である.
- 3 この質問については,調査中,参加者に午後10時から午前5時までの時間帯勤務のアルバイトが深夜アルバイトであると口頭でも説明し,その説明後に回答してもらった.
- 4 近畿地方にある収容定員2,000人以上の大学である.先述の島野(2018)の分類によると,B大学はA1グループ(学部平均偏差値55以上から62.5未満)に属する大学である.

## 引用文献

Bandura, A.(1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191–215.

半澤礼之(2007)「大学生における『学業に対するリアリティショック』尺度の作成」『キャリア教育研究』,第25号,15–24.

半澤礼之(2013)「大学生の将来展望と学業に対するリアリティショック—縦断的面接調査による質的検討—」『北海道教育大学釧路校研究紀要』,第45号,17–24.

岩田弘三(2020)「アルバイト状況」『平成30年度学生生活調査結果』独立行政法人日本学生支援機構,31–37.

厚生労働省(2015)『大学生等に対するアルバイトに関する意識等調査』厚生労働省ホームページ〈<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000103577.html>〉(2020年4月22日)

黒川泰貴・石村郁夫(2013)「大学生の睡眠状態が不登校傾向に及ぼす影響」『東京成徳大学臨床心理学研究』,第13号,3–16.

栗原久(2017)「大学および短期大学の女子学生におけるアルバイト時間と心身の健康度の関連」『東京福祉大学・大学院紀要』,第7巻第2号,101–106.

一般社団法人日本私立大学連盟(2018)『私立大学学生生活白書2018』一般社団法人日本私立大学連盟ホームページ〈[https://www.shidaiaren.or.jp/topics\\_details/id=2040](https://www.shidaiaren.or.jp/topics_details/id=2040)〉(2020年4月22日)

楠奥繁則・中野謙(2015)「セルフ・エフィカシー理論からみた大学生の学業意欲の研究—A大学の『六次産業化の担い手プログラム』での事例—」『大学教育研究ジャーナル』,第12号,8–20.

溝上慎一(2004)「大学新入生の学業生活への参入過程—学業意欲と授業意欲—」『京都大学高等教育研究』,第10号,67–87.

中下紀子・八藤後忠夫(2017)「大学生の日常生活が学業意欲に及ぼす影響」『生活科学研究』,第

39号, 183-192.

西宏樹・柳澤さおり（2010）「大学生のアルバイト活動を通じた学習—アルバイトの目標と活動の意識化の効果—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』, 第42号, 285-292.

関口倫紀（2010）「大学生のアルバイト経験とキャリア形成」『日本労働研究雑誌』, 第52巻第9号, 67-85.

島野清志（2018）『危ない大学・消える大学2019年版』 エール出版社.

下山晴彦（1995）「男子大学生の無気力の研究」『教育心理学研究』, 第43巻第2号, 145-155.

神藤貴昭・石村雅雄（1999）「高等学校と大学の接続に関する研究（その1）—学生の高등학교と大学における学業についての差異の認識の観点から—」『京都大学高等教育研究』, 第5号, 23-39.

神藤貴昭・伊藤崇達（2000）「高等学校と大学の接続に関する研究（その2）—大学の学業文化への参入と学習方略の変容—」『京都大学高等教育研究』, 第6号, 35-52.

高橋大樹・渡部博志・積田淳史・宍戸拓人（2018）「睡眠と大学生活—学修成果・授業への取り組み方・大学への適応・バーンアウトの観点から—」『武蔵野大学政治経済研究所年報』, 第17号, 111-152.

高本真寛・古村健太郎（2018）「大学生によるアルバイト就労と精神的健康および学修との関連」『教育心理学研究』, 第66巻第1号, 14-27.

鉄島清毅（1993）「大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討—」『教育心理学研究』, 第41巻第2号, 200-208.

山本幸子・江口恵理・楊玉華・甲斐美智代・佐藤正昭・白蓋真弥・山崎学・吉村耕一・増田公香・人見英里（2018）「大学生のアルバイトが健康, 学習, 意識変容に及ぼす影響」『山口県立大学学術情報』, 第11号（大学院論集 通巻第19号）, 127-134.

## Effects of Midnight Part-Time Jobs on Undergraduate Student Motivation to Study in the Classroom, Pursue Academics, and Participate in Campus Life

KUSUOKU Shigenori<sup>\*</sup>, NARUSE Kenichiro<sup>\*\*</sup>, NODA Masazumi<sup>\*\*\*</sup>,  
KANO Yuya<sup>\*\*\*\*</sup>, YAMAGUCHI Ikumi<sup>\*\*\*\*\*</sup>, SHINTO Takaaki<sup>\*\*\*\*\*</sup>

### Abstract

Recently, the number of undergraduate students who work as part-timers has increased significantly. A constant fraction of these students work as ‘midnight part-timers’ (from 10 p.m. to 5 a.m.). This study examines (1) whether midnight part-time jobs decrease students’ motivation to study, and (2) whether midnight part time jobs decrease students’ motivation to participate in campus life. We investigate two hypotheses related to (1), that the fatigue associated with midnight part-time work dampens the motivation to study: (H1) When undergraduate students start work as midnight part-timers, their “classroom study motivation” will decrease, and (H2) When the students start work as midnight part-timers, their “academic motivation” will decrease. We also investigate one hypothesis related to (2): (H3) When the students start work as midnight part-timers, their “motivation to participate in campus life” will decrease. Although (H1) and (H2) were not

- 
- \* Correspondence to: KUSUOKU Shigenori  
Associate Professor, Faculty of Management and Law, Aomori Chuo Gakuin University  
12, Kanda, Yokouchi, Aomori-City, Aomori 030-0132 Japan  
E-mail: s-kusuoku@aomoriegu.ac.jp
- \*\* Correspondence to: NARUSE Kenichiro  
Section Chief of Instruction Department, Nagoya Sangyo University  
3255-5 Yamanota, Araicho, Owariasahi, Aichi 488-8711 Japan  
E-mail: naruse@nagoya-su.ac.jp
- \*\*\* Correspondence to: NODA Masazumi  
Faculty of Current Business, Nagoya Sangyo University  
3255-5 Yamanota, Araicho, Owariasahi, Aichi 488-8711 Japan  
E-mail: 1118098@nagoya-su.ac.jp
- \*\*\*\* Correspondence to: KANO Yuya  
Graduate School of Policy Science, Ritsumeikan University  
2-150 Iwakura Ibaraki Osaka, 567-8570 Japan  
E-mail: so0400ef@rirusumei.ac.jp
- \*\*\*\*\* Correspondence to: YAMAGUCHI Ikumi  
Faculty of Current Business, Nagoya Sangyo University  
3255-5 Yamanota, Araicho, Owariasahi, Aichi 488-8711 Japan  
E-mail: yamaguchi20200402@gmail.com
- \*\*\*\*\* Correspondence to: SHINTO Takaaki  
Professor, Graduate School of Professional Teacher Education, Ritsumeikan University  
1, Nishinokyo-Suzaku-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-8520 Japan  
E-mail: tshintou@fc.ritsumeai.ac.jp

supported, (H3) was supported by a panel survey. Therefore, this study finds that midnight part-time jobs decrease students' motivation to participate in campus life, but do not affect their motivation to study.

**Keywords**

midnight part-time jobs, undergraduate students, classroom study motivation, academic motivation, motivation to participate in campus life, enervation